

法科大学院「適性試験」

受講生からの
本試験体験記
“受験レポート”

大学入試センター 2004年6月27日(日)実施試験

試験前 ●●●

いよいよ大学入試センターの適性試験、本番の日。朝からいきなり蒸し暑い、「きっと会場は涼しいはず」などと我が身を慰めつつ家を出る。着いてみると、ものものしい警備だ。会場の大学に入る地点で、すでに人物チェックである。「受験票見せて」との言葉に早速、取り出して見せる。「やれやれ入れた」と思いエスカレーターを上ったら、教室に入る手前で再び「受験票見せて」である。周りの皆も同じ扱いなので、どうやら自分のみが怪しい人物なのではなさそうだ…。

受験前の様子は人それぞれ。だが、やはり前回の過去問があるのは大きい。皆、論理式や真理表など見て最後の準備に余念がない。しかし、どういうわけか教室に時計が無いのに気づく。自分は忘れずに腕時計を持ってきたので問題はないが、後でこれが大正解なのに気づくハメになった。

第1部 ●●推論・分析力

ともあれ、いよいよ第1部「推論・分析力」の試験開始。最初の問題は、日弁連の問題や昨年のセンターでも出た短文による議論を読み取る問題。これは大丈夫。しかし！ 試験は以降の問題であった…。大問は全部で10問あるので、1問にかけられる時間は約9分。それでも、時間をかけずに解法の筋道が見える問題と言え、不確定さという場合分けの数を数えさせる第5問、前回と同じような論理式を作って解く第6問、嘘つきと正直者を探す第8問、与えられた表から推論を進める第9問くらいか。後の問題は一言で言えば、「手ごわい」という印象が強い。何が手ごわいのか？ 受験生に求められている作業は、「①条件・状況を読み取る ②推論・場合分け ③消去による正解の抽出」はわかっている。ただ、それがわかっている、まず①の作業に時間がかかる。第2、3、4、7、10問は、A4の1枚分が条件・状況の説明だから、問題の趣旨を読み取るだけでも結構な時間が過ぎていく。そこから②、③の作業へと進み、さらにそれぞれの問題に取り組まねばならない…。おそらく9分では収まらない。かなりの人が時間不足に苦しんだであろう(ワタシの教室では、第1部開始から30分ほどで、1名が退出しそのまま戻って来なかった。何だか気持ちが分かる気がする…)

第2部 ●●読解・表現力

休憩を挟んで、第2部「読解・表現力」がスタート。こちらも、なかなか「手ごわい」問題が続く。大問が12問あるから、同じく7～8分で処理していかなければ間に合わない計算だ。第2問と第7問は段落の並び替え。過去問ではそれほど時間はとられなかったが、今回は簡単にはいかない。また、第4問では鶴亀算と「鷹虎算」なるものの違いの理解、第9問ではニュートンのプリズム実験の話である。「単なる『長文読解』とは違うのだぞ！」という、大学入試センターの意思が感じられる問題だ。第8問では学生時代を思い出す丸山真男(ワタシの年齢がバレそう…)の登場である。落ち着いて読まねば、彼の痛烈な日本社会批判を見逃してしまいかねない。やはり、第2部も「問題の路線に変化あり？」なのだろうか。それとも、まだ2回目の試験だから「流動的」なのだろうか…。

試験終了 ●●● 受験生の皆さん、本当にお疲れ様でした。

もはや終わった試験であるので、自分を含めて、受験生に皆様には「お疲れ様！」の一言に尽きる。ただ、どうしても引っかかること。それは、この試験は、「法科大学院入学への適性を測る試験」のほず。試験では、1問題に時間はかけられないのでテキパキと処理していかなければならない(とくに第1部)。しかし、問題文を読むことに時間を取られていては、望むべくもない話。普段から時間を設定し、煩雑な問題による解答の練習を積んでいなければ、適性試験に対する準備とは言えない。

しかし、このことがはたして“法曹としての適性”に通じるのだろうか…。何だか疑念を残した試験であった。